

# 国文学研究資料館初雁文庫蔵『浜松中納言物語』について

赤迫 照子

## A Study on Hamamatsu chunagon monogatari in the hatsukari Collection of the National Institute of Japanese Literature

Shoko AKASAKO

### はじめに

引き続き、『浜松中納言物語』写本の調査結果を報告する。<sup>(1)</sup> 今回調査したのは、国文学研究資料館初雁文庫蔵『浜松中納言物語』（資料番号一二・六〇八。一冊。以下、「初雁本」）の、マイクロ複写である。書誌情報は既に国文学研究資料館編『初雁文庫主要書目解題 付初雁文庫目録』（明治書院昭56）にて報告されているが、他本との関係や書入の内容について、新たな気付きを記す。

### 一、書誌

初雁本は、岡山大学・東京教育大学・上智大学教授であった故西下経一氏の旧蔵書である。『国書総目録』や小松茂美氏『校本浜松中納言物語』（以下、『校本』。二玄社 昭39）に記載はない。『初雁文庫主要書目解題 付初雁文庫目録』（二一五頁）には次のようにある。

紺無地の表紙で、外題なし。内題（本文端作り）は「濱松中納言物語」とある。二七・〇×一八・七cm。袋綴。料紙は楮紙。本文墨付八七丁。一面一〇行。江戸中期写。

卷一だけの零本。本文は、小松茂美『校本浜松中納言物語』にFと分類する系統に近いが、またD系統とも共通する一面を持つ。混態本の一種と考えるとよからう。本文の行間には、「うむれい」に「雲嶺」、「かく

しう」に「杭州敷」、「あふみのうみ」に「近江湖」とするような漢字による傍注のほか、上方余白には「おもふかたの風」について「躬恒家集下、浪たゝはおきの玉もゝよりくへくおもふかたより風のふかなん」とか、「みねたかくたにふかく」に「朗詠集 蒼波―橋直幹石山寺にて作れる詩也」などとする細字注が付される。

この他に、以下のことが確認された。

① 表紙見返に「この物かたりのうちに／ひのものとみつのはままつこよひこそ我／をこふらしいめにみえつれ この哥を／もてこの物語の名とせり これはもと／万葉集の歌もてはめる也」「続後撰集十二恋 寄松恋左衛門督通成／よそにのみみつのはままつ年をへてつれなき色にかゝる浪かな」の書入がある。

② 朱印が二種存する。国文学研究資料館の電子図書館「蔵書印データベース」によれば、江沢講修（天明元〈1781〉〜万延元〈1860〉）の蔵書印「睦堂」と、西下経一氏の蔵書印「西下蔵書」である。

③ 七三丁ウラ・七四丁オモテ・同ウラ・七七丁オモテは一面九行。

④ 「イ」本による校合あり。

⑤ 本文に句読点・濁点を付す。

二〇一五年一月三〇日（受理）

赤迫 照子

宇部工業高等専門学校一般科准教授

⑥上欄の注の書入（『初雁文庫主要書目解題 付初雁文庫目録』でいう細字注）は18箇所あり、これらは筑波大学附属図書館蔵本（資料番号ル一二〇・七九。四巻四冊。『校本』「諸本解説」ではF系統の東京大学附属図書館蔵本のこと。略号<sup>④</sup>。以下、<sup>④</sup>本。筑波大学附属図書館は他にも写本二点を所蔵する）巻一にある書入36箇所（脱文を補入する1箇所を除く）の内の16箇所とほぼ一致する。両本は文字の様相がやや似ており、「イ」本注記や漢字の注といった本文の傍書も一致するものが多いので、近い関係にあるといえる。なお、『校本』は東北大学附属図書館狩野文庫蔵本（四巻四冊。以下、狩野本）は<sup>④</sup>本の臨模本であると指摘するが、上欄書入は全て一致する訳ではない。<sup>④</sup>本の36箇所の内、狩野本には27箇所所存する。<sup>③</sup>

## 二、伝本系統・共通脱行箇所

本文は、『初雁文庫主要書目解題 付初雁文庫目録』にあるように、初雁本は松尾聰氏の分類のF系統であった。池田利夫氏が提示された共通脱行箇所数による分類では、乙類第一種に該当する（以下、「F類／乙類第一種本」。他本も両分類を併記する）。

以下、共通脱行7箇所を掲出する。最初に池田氏による番号と宮下清計氏校注『新註国文学叢書』（昭26 講談社）本文を示し、脱行部分には傍線を付す。続いてその頁数・行数を記す。次の（ ）内には脱行させた伝本の略号をA～F類の分類名とともに掲げる。略号は『校本』のものを使用し、底本であるC類／乙類第一種の不二文庫本は「不」とする。○以下には初雁本の本文を示し、（ ）内に丁数・行数を記す。

### 卷一：7箇所

- 1 知らまほしきに、后、御簾をおろして入り給ひぬ。飽かずなかなか、半なる月を 一〇二・12（B宮忍理閑歌、C松浅鶯尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩）
- しらまほしきになかばなる月を（一一ウ8）
- 5 眺めけむ人のやうに、この戸閉ぢられて、心細く、あるかひなき様に侍れど、 一〇九・8（B宮忍理閑歌、C松浅鶯尾荆不、D居乃無春、E浜神教花千刈、F育由百狩）
- ながめけん人のやうに侍と（二一オ9）
- 12 かへりきたるに、世に馴れぬ人にはあらざんめり。誠につつむべきにこそはあらめ。 一二五・1（B宮忍理閑歌、C松浅鶯尾荆不、D居乃無春、

E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○かへりきたるにつゝむへきにこそはあらめ、（四一オ2）

14 なりまさるにつけても、この後の、見し人にもいとよう覚えしも見奉らほしうて、 一二八・11（B宮忍理閑歌、C松浅鶯尾荆不、D居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○なりまさるにつけてもみたてまつらまほしうて（四六オ1）

18 ありける事のやうにて、隠し養ふに、日に日に物を引き延ぶるやうにて、ゆゆしきまで、 一三八・4（B宮忍理閑歌、C松浅鶯尾荆不、D居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○ありける事のやうにてゆゆしきまで（五六オ10）

22 実にあるわざにこそと思しつづく。明後日ばかり帰り給はむとの夜、月限もなく、 一五五・6（B宮忍理閑歌、C松浅鶯尾荆不、D居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○げにあるわざにこそと月くまもなく（七八ウ1）

24 このついでに、忍びがたき心のうちをうち出でぬべきにもさすがにあらざ、 一五八・3（B宮忍理閑歌、C松浅鶯尾荆不、D居乃無春、E 浜神教花千刈、F 育由百狩）

○このついでにもさすがにあらざ（八一ウ9）

## 三、上欄の書入

次に、⑥で述べた上欄の書入18カ所を掲出する。「1」の通し番号に続いて施注本文を記し（ ）内に丁数・行数を記す。以降には、小学館新編日本古典文学全集の本文・（ ）内に頁数・行数を記す。次の○には書入本文を記す。典拠がある場合は：に続けて引用した。

「1」おもふかたのかせなん、ことにふきおくることちして、（一オ5）：思ふかたの風なむことに吹き送る心地して（三一3）

○おもふかたの風 躬恒家集下 浪たゝはおきの玉もゝよりくへくおもふかたより風もふかなん：『玉葉集』巻第十五・雑歌二・凡河内躬恒・二一

○六「浪たたばおきの玉藻もよりくべくおもふ方より風はふかなん」<sup>⑥</sup>

「2」さうはみちとほしくもせんり（二オ2）：「蒼波路遠し雲千里」（三二3）

○朗詠集蒼波みち 橘直幹石山寺にて作れる詩也：『和漢朗詠集』卷下・行旅・六四六・橘直幹「蒼波路遠雲千里 白霧山深鳥一声」<sup>⑦</sup>

「3」御かどのせんじくだりて内裏の承願殿といふ所にめしありて（三ウ6）

：御門の宣旨くだりて、内裏の承願殿といふところに召しありて（三三  
11）

○此文唐代の事<sup>ニ</sup>あてゝ云りと見ゆさらは承願天は貞願殿の語なるへし

「4」あつまりてうそふくめれと（七ウ4）：集まりてうそぶくめれど（三七  
6）

○言祝寿歟

「5」おく露もきりたつそらもしかの音も雲井のかりもかはらざりけり（七ウ  
10）：置く露も霧立つ空も鹿の音も雲居の雁も変らざりけり（三七10）

○風葉離別：『風葉和歌集』巻第八・羈旅・浜松中納言・五九九「おく露も  
霧たつそらもしかのねも雲の空もかはりやはする」

「6」くむるはにといふ物ぬりたるやうに（一〇ウ7）：くちびるは丹といふ  
もの塗りたるやうに（四〇7）

○ひるはにといふもの干埴か

「7」らんけいゑんのあらしの（一一ウ2）：「蘭蕙苑の風の」（四一3）

○朗詠菊 花寒菊点叢菅三品 蘭蕙苑嵐摧紫後蓬萊洞月照霜中：『和漢朗詠  
集』巻上・菊・二七一・菅原文時「蘭蕙苑嵐摧紫後 蓬萊洞月照霜中」

「8」この花ひらけてのち（一一ウ5）：「この花開けて後」（四一4）

○朗詠菊 古菊花 元植 不是花中偏愛菊此花開後更無花：『和漢朗詠集』  
巻上・菊・二六七・元植「不是花中偏愛菊 此花開後更無花」

「9」みつばよつのはの殿つくりして（一六オ1）：三つば四つばの殿造りし  
て（四五11）

○このとははむへもとみけりさきくさのみつはよつはにどのつくりせり：惟  
馬楽「此殿」「三枝の三つば四つばの中に殿づくりせりや殿づくりせり

「10」にさうの人など（一九ウ2）：にさうの人など（四九4）

○二相敷人相敷憲云耳聽にてもあらんか  
「11」ひのもののみつのはまゝつこよひこそ我をこふらし夢にみえつれ（二  
三オ10）※「ひのもと」の左に「風葉離別」とあり：日本の御津の浜松  
こよひこそわれを恋ふらし夢に見えつれ（五三8）

○万葉第五山上憶良 大伴御津松原可吉掃弓和礼立待速歸坐勢：『万葉集』  
巻第五・雑歌・山上憶良・八九九「大伴御津松原可吉掃弓和礼立待速歸  
坐勢」

○風葉離別：巻第八・羈旅・五九八・浜松中納言「日の本のみつのはままつ  
今夜こそ夢にみえつれ我を恋ふらし」

「12」年たちかへりぬるあしたのそらはいつくもかはらぬものなれはかすめる  
そらも、うぐひすのねも（二四オ4）：年立ちかへりぬるあしたの空は、

いづくも変らぬものなれば、霞める空もうぐひすの音も（五四5）

○あら玉の年立かへりあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ：『拾遺集』巻第  
一・春・五・素性法師「あらたまの年立帰る朝よりまたる物はうぐひ  
すのこゑ」

「13」はるやむかしの（二四オ）：「春や昔の」（五四7）

○伊物 業平 月やあらぬ花やむかしの花ならぬ我みひとつはもとのみにし  
て：『伊勢物語』第四段・在原業平「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が  
身ひとつはもとの身にして」

「14」一のきさきのちの大臣（二六ウ1）：一の後の御父の大臣（五六10）

○一ノ後の父大臣或は一のきさきの致仕の大臣カ  
「15」つきかけのうかへるみつはくむまてにあはれいくよをなかめきぬらん  
（三六オ2）：月かげの浮べる水は汲むまてにあはれいく世をながめ来  
ぬらむ（六七8）

○古今 檜垣おうな としふれは我黒髪も白川のみつはくむまて老にけるは  
：『後撰集』巻第十七・雑三・一一一九・檜垣姫「年ふればわがくろか  
みもしら河のみづはぐむまで老にけるかな」

「16」つらぶ多をつきて（三六ウ6）：頬杖をつきて（六八8）

○つらつゑ つら之 ことしけき心よりさく物思ひの花の枝をはつらつゑに  
つく：『貫之集』巻第九・八二四「ことしけき心よりさく物思ひの花の  
枝をはつらつゑにつく」

「17」あさきりのみねにも尾にもたちこめて帰らんかたもえこそしらね、（五  
四ウ10）：朝霧の峰にも尾にも立ちこめて帰らんかたもえこそ知らね  
（八七3）

○この哥源氏物語の夕霧の大將小野にいまして山里のあはれをこむる夕きり  
に立いてんそらもなきこゝしてにたり：『源氏物語』夕霧巻・五  
二六・夕霧「山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して」

「18」なみのうへのをふねはとまるありとききたよふ水におもひこかるゝ  
（七七オ5）：波の上の小舟は泊りありと聞くただよふ水に思ひこがる  
る（一一〇8）

○天徳哥合平兼盛しふれといるににけり我恋はものやおもふと人の  
とふまて：『天徳内裏歌合』恋・二十番・四一・平兼盛「しのぶれとい  
るにいでにけりわがこひはものやおもふと人のとふまて」

これらで「本」とほぼ一致するのは「4」「15」以外の16箇所である。「本」の上  
欄書入には比較的大きめの字と小さな字の二種があり、別筆とみられる。初  
雁本の書入は、全て大きめの字の書入の方のものであった。注目されるのは

〔10〕の、「耳聴」説を提示した「憲」なる人物である。『浜松中納言物語』書写に関わる人物であろうか。狩野本には〔10〕と同じ書入が存するが、〔畜〕本は〔10〕に続いてさらに「入宋敷」という説も記す。

注の相違を他にも掲げておく。〔2〕〔11〕は初雁本の方が簡略である。

〔2〕

〔畜〕本（二才2）

○朗詠集雜 行旅 直幹 蒼波路遠雲千里簿<sup>イ</sup> 霧山深鳥一声

狩野本（二才2）

○朗詠集雜 行旅 直幹 蒼波路遠雲千里簿 霧山深鳥一声

〔11〕

〔畜〕本（二三才10）・狩野本（二三才10）

※初雁本と同じく「ひのもと」の左に「風葉離別」とあり

○万葉第五山上憶良 大伴御津松原可吉掃立和礼立待速帰坐勢

これに続いて二三ウ上欄に、小さな字の方の筆で次のような書入がある。

○拾遺百番哥合廿一番左 源氏右御津濱姿 中畧

旅ねの夢に日本の大将の姫君誰により涙の海に身をしつめしほたるゝあ  
まとなりぬとかしると見え侍りければ

中納言<sup>濱姿中納言</sup>

日の本のみつの濱姿今宵こそ夢に見えつれ我をこふらし

### むすび

『校本』は〔畜〕本について、「巻頭の遊紙には清水浜臣の識語などが加えられて」とするが、厳密には、宮内庁書陵部蔵清水浜臣旧蔵本に書かれた考証・識語とは異なる。例えば、『拾遺百番歌合』の『浜松』の和歌や『更級日記』定家奥書を引く箇所では「羣書類従卷三百十三」「羣書類従卷三百廿八」とわざわざ記していたり、また、清水浜臣の「濱按此書は」云々の考証は存しない。この遊紙表の書入は小さな字の方の筆跡で、狩野本にはあるが、初雁本にはない。〔畜〕本の遊紙裏の書入であれば、表紙見返しに存する（Ⅱ「一、書誌」①）。このようなことから、〔畜〕本の親本に大きめの字の書入が記されており、それを転写した〔畜〕本に、新たに小さな字による書入がされたと推察される。そして初雁本は、小さな字の書入がない、〔畜〕本の兄弟本を転写したものであるうか。〔畜〕本の調査を深めつつ、F系統の写本間の関係の整理や、F系統が生まれた過程の解明を今後の課題としたい。

### 注

- (1) 拙稿「大阪府立中之島図書館蔵中西文庫本『浜松中納言物語』について」（『広島大学大学院文学研究科論集』第72巻普通号 平24・12）、「萩市立萩図書館蔵『浜松中納言物語』について」（『宇部工業高等専門学校研究報告』第60号 平26・3）。
- (2) 国文学研究資料館のマイクロ複写の調査による。
- (3) 東北大学附属図書館のマイクロ複写の調査による。
- (4) 松尾聰氏「浜松中納言物語伝本考―本文批評の方法の实例を示すための―」（『学習院大学研究年報』第1号 昭29・12）によるA、Fの六種の分類。
- (5) 「浜松中納言物語伝本系統試論」（『鶴見女子大学紀要』第10号 昭42・12 後に『更科日記浜松中納言物語攷』武蔵野書院 平1所収）による甲・乙第一、第四の分類。
- (6) 和歌本文・歌番号の引用は『新編日本国歌大観』による。
- (7) 和漢朗詠集本文の引用・番号は菅野禮行氏校注・訳「新編小学館日本古典文学全集」『和漢朗詠集』による。
- (8) 催馬楽本文の引用は白田甚五郎氏・新間進一氏・外村南都子氏校注・訳「新編小学館日本古典文学全集」『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』による。
- (9) 「にさう」は諸説ある。池田利夫氏校注・訳の小学館新編日本古典文学全集では、『今昔物語集』を典拠とした刈谷図書館蔵本の書入「二生ノ人ナルベシ 旧本今昔卷十四二条汝二生ノ人也 前生ニハ云々」を紹介しつつも、顔立ちが似るといふ意の「似相」ではないかとし、須田哲夫氏・佐々木新太郎氏『校訂浜松中納言物語』（勉誠出版 平17）も「似相」の字をあてる。中西健治氏『浜松中納言物語全注釈』（和泉書院 平17）は「二生」とする。久下晴康氏編『浜松中納言物語』（桜楓社 昭63）は「似相」ないし「二相」とし、静嘉堂文庫蔵日尾荆山筆本にある『今昔物語集』の書入を紹介する。

### 付記

本稿は、平成二十六年科学研究所費補助金若手研究（B）研究課題番号770085「書入を手がかりとした『浜松中納言物語』本文生成過程の研究」による研究成果の一部である。